

◎地域に眠る「蔵」を活用した景観づくり、店舗経営や商品開発等への支援を通じて、まちなかに新たなにぎわいを創出する

No.2	まちなみ・蔵庭プロモーション協議会		
事務局	かね喜	実施エリア	喜多方市

事業名
まちなみと蔵庭を活かした「駅〜まちなか」をつなぐプロジェクトに対する中間支援活動

事業の概要
まちなかに多く残る「蔵」を活用した歴史的なまちなみの景観形成や「蔵」の利活用等に取り組む地元の商工振興会や町内会、NPO 法人等に対して、景観づくりや「蔵」・空き店舗を活用した店舗等の企画・運営、商品開発等を支援し、まちなかに新たなにぎわいを呼び込み、地域の活性化につなげる。

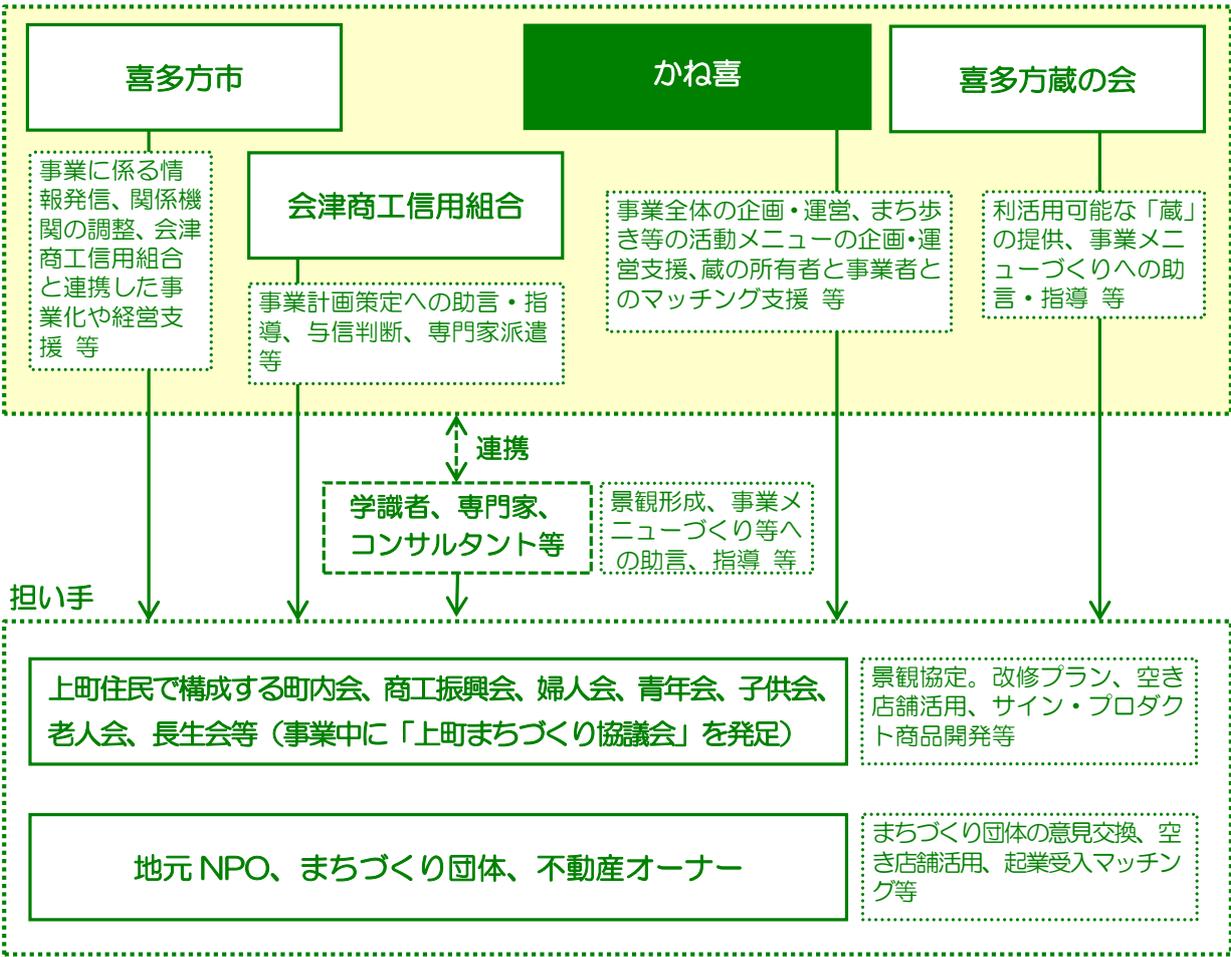
中間支援の概要
「蔵」を活用した歴史的なまちなみの景観形成や「蔵」・空き店舗の利活用（仮想商店街の実施、店舗活用等）等に取り組む地元の商工振興会や町内会、NPO 法人等に対して、景観デザインづくり、地域住民によるワークショップの企画・運営、空き店舗の改修プランづくり等の支援を行う。

主な構成主体	中間支援の内容
①かね喜	事業全体の企画・運営を担うとともに、まち歩き等の活動メニューの企画・運営支援、蔵の所有者と事業者とのマッチング支援等も行う。
②喜多方市	事業に係る情報発信、関係機関の調整、会津商工信用組合と連携した事業化や経営支援等を行う。
③会津商工信用組合	市の創業支援事業に支援者として参画しており、本事業では事業計画策定への助言・指導、与信判断、専門家派遣等を担う。
④喜多方蔵の会	「蔵」の所有者やファンを中心としたメンバーで構成され、利活用に向けた「蔵」の提供とともに、事業メニューづくりへの助言・指導等を行う。

支援対象	地域づくり活動の内容
①上町まちづくり協議会 (町内会、商工振興会、婦人会、青年会等)	沿道の花壇整備、街路灯の管理・運営、祭礼出店、敬老会の開催等を行っている。 景観協定・改修プランの検討、空き店舗活用、サイン・プロダクト商品開発等に取り組む
②地元 NPO、まちづくり団体、不動産オーナー	甲斐本家の利活用の提案、販売委託等を行っている。 まちづくり団体の意見交換、空き店舗活用、起業受入マッチング等に取り組む

## 実施体制

### まちなみ・蔵庭プロモーション協議会



## 取組内容

### 取組①甲斐本家の活用と景観づくり

景観協定や景観まちづくりに関する勉強会の開催や、上町や甲斐本家活用に関する PR を行うためのブックレットの制作、空き家活用のためのサインやネーミングの検討等を行った。

### 取組②仮想商店街プロジェクト

空き家活用に向けて、大学生を中心に図面作成を行い、中高生が手伝いながら改修を行い、活動の拠点「上町我家」を整備した。また、完成した拠点において、小学生等が駄菓子等を売る「仮想商店街プロジェクト」を行った。プロダクトグッズや販促ポスターを検討するためのワークショップも開催した。

### 取組③空き家・空き店舗の活用

取組②を踏まえて、地域子ども達とともにポスターやプロダクトグッズの制作に取り組んだ。また、景観まちづくりの観点から、上町の景観改修プランの検討を行った。

# 1 中間支援の活動プロセスにおける課題と対応

プロセス	支援対象	中間支援	成果・効果
取組の背景・動機	<ul style="list-style-type: none"> <li>喜多方市は蔵が4,200もある日本一蔵の多いまちであるが、多すぎるがゆえに市民が蔵の良さを認識しにくくなっている。</li> <li>蔵のまち喜多方として最大の観光資源であったはずの甲斐本家蔵座敷が、福島第一原発事故風評被害で閉館、三セクで再開するが賃借のため制限が多く、思うようなサービスが提供できない状況となっている。</li> <li>それにより、観光客の減少、空き店舗・空き家の増加が起こっている。</li> <li>喜多方ラーメンを目的とする観光客は増えているが、食べて帰るだけとなっており、滞在時間も短く、大きな経済効果にはつながっていない。</li> <li>以前のように「蔵のまち散策」で風情に触れ合ってもらい、滞在時間を伸ばしていきたい。新たな地域の担い手が店舗を構えたり、まちづくりに参画したりして賑わい創出に結びつけたい。</li> </ul>		
体制構築のきっかけ		<ul style="list-style-type: none"> <li>かね喜は、喜多方市において中間支援的な活動を行ってきた団体であり、地域に根ざした蔵等の地域資源を活かしたまちづくりに取り組んでいる。</li> <li>喜多方のシンボリックな存在である甲斐本家が震災後の風評被害を受け、存続が難しくなったため、喜多方蔵の会が地域を巻き込んで、任意団体（利活用保存協議会）を設立し、甲斐本家の利活用を検討していた。</li> <li>会津商工信用組合には、以前、まちづくり活動の中で、蔵を譲り受ける際の融資を受けるなど、活動への理解があり、いろいろと協力していただいた経緯があった。</li> <li>会津商工信用組合は、経産省の指導を受け、「創業補助金」の認定支援機関となっていることから、喜多方市には特別総合支援事業者として関わっており、NPO法人まちづくり喜多方（当該法人からペロタクシーの企画・運営部門を切り離し、「かね喜」を設立）と連携して、事業計画策定支援、融資等の創業者支援を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事業以前より関係性のあったメンバーが、蔵等の地域資源の活用、甲斐本家の利活用促進等を通じた喜多方市の活性化という目的を共有できたことから、体制の構築に至った。</li> </ul>
支援対象の選定	<ul style="list-style-type: none"> <li>上町の町内会、商工振興会、青年会は、アーケード撤去や街路整備、景観整備が進んだ隣接する仲町の事例を先行事例として捉え、勉強会を3年間行ってきた。</li> <li>商工振興会の中にある街路灯組合の解散が決まり、街路灯を全て消灯・撤去することになった。</li> <li>沿道の事業者等が、街路灯の撤去決定を機に、益々まちづくりの必要性を感じていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まずは地域に危機感を感じてもらおうとともに、まちづくりを自分ごととして捉えてもらうことが重要との認識から、勉強会を開催してきた。</li> <li>仲町の整備に関わったコアメンバー（町内会や商店会のメンバー、建築家、有識者等）も講師やアドバイザーとして参画。</li> <li>上町の街路灯の維持管理費の確保が難しくなり、街路灯組合が解散したことを受け、12/12（土）に上町のまちづくりに向けた団体設立の説明会を開催し、任意のまちづくり団体設立が承認された。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>上町住民で構成する町内会、商工振興会、婦人会、青年会、子供会、長生会等が担い手となった。</li> <li>その他、地元NPO、まちづくり団体、不動産オーナーも担い手となった。</li> <li>任意組織「上町まちづくり協議会」の設立に至った。</li> <li>新たに「喜多方ストリートカルチャー協議会」が設立され、担い手となった。</li> </ul>
商品企画・開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>空き家の活用に関して、地域に利用してもらえる活用方法を検討する必要があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>空き家の改修にあたっては、専門家の意見を聞きながら、大学生が中心となって地域で利活用するための図面作成に取り組み、それをもとに大学生が中心となって、地元の中高生等も手伝いながら改修を行った。</li> <li>また、空き家を活用した「仮想商店街プロジェクト」では小学生を中心に駄菓子やプロダクトグッズを販売する体験を行った。</li> <li>空き家のネーミングやサインを検討する際にも、専門家を交えたワークショップによって住民主体で検討を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の住民参加を積極的に促進させるプロセスを組み込むことで、地域の認知や理解度が高まるとともに、地域に愛され、利用してもらえる拠点となった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の歴史や文化を踏まえた地域に愛されるプロダクトグッズを製作する必要があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロダクトグッズの検討、制作にあたっては、地域住民の参加を基本として、専門家を交えたワークショップ形式で行った。</li> <li>ペンギンドリンクは青年会と子供会育成会、ペンギンパンは婦人会、トートバッグは子供会と町内会がそれぞれ提案する等、担い手の主体性を尊重して進められた。</li> <li>プロダクトグッズの販促ポスター制作においても、子ども達をモデルに起用する等、地域の巻き込みを意識した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペンギンドリンク、ペンギンパン、上町トートバッグ等、地域が考えたアイデアを具体的な形にすることができた。</li> </ul>
デザイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>喜多方市の地域資源や魅力、まちづくり活動等を分かりやすく訴求力を持って伝えられる販促ツールの制作が必要であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ブックレットの制作にあたっては、体制と担い手で意見交換を重ねて、掲載する内容等を考えるとともに、どのようなコンセプトやデザインにするかについても丁寧に話し合うようにした。</li> <li>デザイナーにお願いする際には、担い手が考えた意見やアイデア等を伝えて理解してもらった上で、デザインに反映してもらうようにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>喜多方市の地域資源や新たに制作したプロダクトグッズ、地域の魅力が詰まったデザイン性の高いブックレットが完成した。</li> </ul>
販路開拓	—	—	—
広報・プロモーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の活動に対する認識や理解を深めてもらうとともに、参加を促進させることが課題となっていた。</li> <li>市外や県外、全国に向けた担い手の活動周知が課題であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「上町我家」を拠点として、地元の小中高生を対象としたワークショップを開催し、地元ならではのプロダクト商品を考えたり、実際に制作したりした。</li> <li>プロダクトグッズ販促のためのポスター制作では、小学生をモデルに撮影会を行うなど、地域を巻き込んだプロセスを重視した。</li> <li>新聞、ラジオ等のメディアを活用して広く周知を行った。</li> <li>Facebookのイベント機能を活用して周知を行ったことで、Facebookでつながりのある身近な友人・知人を通じて、連鎖的な周知ができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>空き家を改修して完成した「上町我家」は普段より地域の子供達等が利用する地域の拠点となった。</li> <li>メディアを活用した広範囲な周知につながった。</li> <li>Facebookの活用により、一定の信頼性のある人的ネットワークを通じた周知ができた。</li> </ul>
モチベーションの維持・向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域では、街路灯撤去の決定により、上町の衰退に対する危機感が高まっていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>危機感の高まりをチャンスと捉え、地域の主体性の醸成やまちづくりへの機運を高めることを目的として、地域が主体的にまちづくりを進めていくための任意団体設立の説明会を12/12(土)に開催した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の意識が変わり、個々で動いていたまちづくり活動がひとつの組織体へとまとまることができ、意識の共有が図られた。</li> </ul>

## 2 中間支援のポイント（取組の中で見られた工夫・取組が上手く進んだポイント等）

### ①地域の積極的な参画を重視した商品開発やデザインのプロセス

空き家の改修にあたっては、地域の参加促進を重視したプロセスを考えた。専門家の助言・指導を受けながら、まずは大学生が中心となって空き家改修の図面作成に取り組んでもらった。その図面をもとに、大学生が中心となり、地元の中高生等の参加も促しながら、地域が主体となって改修を行うようにした。また、空き家のネーミングやサインを検討する際にも、専門家の意見を交えながら、ワークショップ形式で、担い手が主体となって検討を行うように支援した。

また、空き家を活用した「仮想商店街プロジェクト」では、小学生やその親、担い手の参画を促し、小学生が駄菓子やプロダクトグッズ等を販売する体験をしてもらった。

プロダクトグッズの検討、制作にあたっては、地域住民の主体性を引き出すことに留意し、専門

家を交えたワークショップ形式での検討を支援した。検討の結果、ペンギンドリンク、ペンギンパン、上町トートバッグといったプロダクトグッズが制作されたが、これらは、それぞれ担い手の提案がもとになっている。

その他、ブックレットの制作にあたっては、体制と担い手で意見交換を重ねて、掲載する内容等を担い手を中心となって考えてもらうとともに、どのようなコンセプトやデザインにするかについても丁寧に話し合った上で、話し合った内容をデザイナーに伝えて反映してもらうようにした。

プロダクトグッズの販促ポスター制作においても、地域の巻き込みを意識し、子ども達をモデルに起用した。

空き家の利活用検討や改修、プロダクトグッズの制作、ブックレットづくり等、地域づくりに関わる様々なプロセスに地域が参画できる仕組みを組み込むことで、地域に愛される空き家活用や商品づくりにつながっており、地域の愛着や誇りの醸成にも寄与していると考えられる。

## ②メディアやFacebookを上手く活用した効果的な周知

市外や県外、全国に向けて担い手の活動や喜多方市におけるまちづくり活動を知ってもらうために、新聞、ラジオ等のメディアを活用して広く周知を行う支援を行った。

また、Facebookのイベント機能を活用して周知を行ったことで、Facebookで友人としてつながっている身近な友人・知人への周知とともに、その友人・知人を介してさらに次の友人へと人的なつながりを使った連鎖的な周知ができた。

これにより、広範囲な周知（メディア）ができたことに加えて、Facebookの活用により、一定の信頼性のある人的ネットワークを通じた周知ができ、一過性だけではなく、今後のつながりや関係性の形成が期待できる周知につながった。

## ③地域の衰退に対する危機感をチャンスと捉えたまちづくり組織の設立

上町の街路灯撤去が決定したことにより、担い手の中では、地域の衰退に対する危機感が高まっていた。この危機感の高まりをチャンスと捉えて、地域が主体となったまちづくりへの機運を高めるために、これまで勉強会やまちづくりの検討等を行ってきた担い手を中心に、まちづくりのための任意組織を設立することを考えた。

そして、平成27年12月12日に担い手に対して団体設立に向けた説明会を開催し、意見交換を重ねた結果、担い手の理解を得ることができ、平成28年1月16日に「上町まちづくり協議会」が設立された。

団体の設立によって、これまで個々で動いていたまちづくり活動がひとつの組織体へとまとまることができ、地域の意識が変わるとともに、意識やビジョンの共有が図られた。

## 3 支援対象の成果

歩行者の増加に関しては、「上町我家」の開設が遅れた関係で、降雪時期の調査となったため、当初の目標を達成することができなかったが、来年度以降、同時期（10月）に調査を実施すれば、達成できると考える。

また、通年開館の予定だった甲斐本家が、市が取得する関係で調査に入ってしまう閉館（12～3月）となったことから、目標に達しなかったが、原発事故直後の風評被害が大きい時期の最低入館者数でも649人/月であり、仮に閉館中であった4か月（12～3月）にその人数が来場したと想定しても合計11,068人となる（達成値8472人+649人×4か月）。そのため、来年度以降は目標値を

超える来場者数が期待できる。

空店舗・駐車場等を活用したイベントの開催では、当初の目標を達成することができた（仮想商店街プロジェクトの開催）。

試験的プロダクトの売上については、合計 92,100 円の売上見込みとなり、目標の 6 万円を大きく超える結果となった。売上の内訳は以下の通りである。

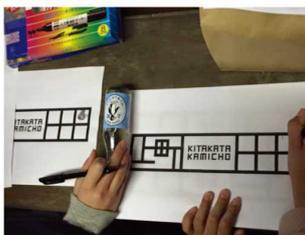
○ペンギンドリンク：150 円×116 本=17,400 円
○ペンギンパン：10,000 円分（約 70 個完売）
○上町トートバッグ：29,700 円+年度末町内総会時に 35,000 円（70 個回覧板用として）

表 成果目標の達成状況

成果指標	事業開始当初	目標	達成状況
①歩行者の増加(イベント時)(国道 459 号上町地区)	約 600 人 (H21 調査)	1,000 人	降雪時の冬季：445 人 (未実施時：92 人)
②甲斐本家の入場者数	年間 8,022 人	年間 10,000 人	年間 8,472 人
③上町地区の空店舗・駐車場等を活用したイベントの開催	—	1 回	1 回
④試験的プロダクトの売上(2 試作品を計画)	0 円	60,000 円	92,100 円



上町我家の利用風景



プロダクトグッズづくりワークショップの様子



子ども達をモデルにしたポスター制作



完成したブックレットの内容

#### 4 地域づくり活動支援体制としての成果と課題

##### ◎地域ブランディングや空き家・空き店舗利活用のノウハウ蓄積

まち独自の商品開発等におけるブランディング手法や、住民を巻き込んだ商品開発ワークショップの方法等について、デザインやまちづくり等の専門家の助言や指導を受けつつ、話し合いながら企画・実施したことで、体制としてのスキル・ノウハウの蓄積につながった。

また、空き家・空き店舗の利活用に関する勉強会や、改修・利活用の支援を実践的に行ったことで、空き家等の利活用を行っていく上での企画・運営、管理方法等に関するノウハウも蓄積することができた。

##### ◎体制との効果的な連携

喜多方蔵の会との連携では、蔵に関する専門的知見や意見等を共有できたことで、文化財になり得る地域資源であることを認識でき、また、その資源を活用したまちづくりの手法も学び、担い手への情報共有が図られた。

喜多方市との連携では、景観協定による助成制度等、沿道整備による賑わい創出に対する支援を得られた。また、ワークショップやまちづくり会議等における備品の用意、県との関係づくり等でも支援を得られた。

会津商工信用組合との連携では、他の金融機関にはない独自のものづくり補助制度や、起業・創業及び創業してからの商品開発における専門家派遣、融資に関する細かなアドバイス体制等が整備されており、現場にもすぐに来てもらえるような関係性を築けた。この関係を、今後も中間支援の現場で横展開していきたいと考える。

## 5 地域づくり活動支援体制としての今後の展望

### ◎継続的な中間支援に向けた活動費用の確保

「上町我家」に関して、今後は、イベントスペース、シェアオフィス、蔵住まいの滞在体験施設、地元の飲み会等での会場等に活用していくことを考えており、それぞれ利用料を徴収して、中間支援の活動費に充てていくことを考えている。

### ◎担い手に対する支援予定

平成 28 年度以降も、上町まちづくり協議会への支援を継続し、街路整備に関する勉強会やワークショップの開催を行い、検討を継続していく。

新たに発足した「喜多方ストリートカルチャー協議会（オリンピック競技にもノミネートされたスケートボードやストリートスポーツ、音楽、ダンス、ものづくりなどの楽しみを共有する団体）」は、スポーツ選手の育成等に関わる事業への参画を予定しており、体制としても支援を継続する。

「上町我家」では、金融機関と連携した創業支援の相談窓口を設置することを考えており、シェアオフィスとしての活用と合わせて、起業支援を行っていくことを考えている。